

理工学部体育會 75 年おめでとうございます

慶應義塾三田體育會会長 西岡 浩史



設立時は鍛錬部、のちに体育会として 75 年に亘る歴史と伝統を築いてこられた多くの関係者に改めて敬意を表しますとともに衷心よりお祝い申し上げます。日吉、目黒、登戸、志木、溝の口、小金井などと転々とされながら研究、実験、体育、授業との両立に精出され今日をお迎えされた皆様におかれましては、筆舌に尽くしがたい労苦の多々と推察します。それだけに強い信頼関係、強い絆で結ばれた体育会、と思料します。

福澤諭吉先生の、「先ずは獣身を成して人心を養う」、慶應義塾建学の精神、知徳体のもと慶應義塾体育会は明治 25 年(1892 年) 5 月にご二男の福澤捨二郎会長を初代として剣術、柔術、野球、端艇、弓術、操練、徒歩の 7 部をもって創設されました。2017 年には 125 周年を迎えます。

現行の会則によれば、その目的とするところは「スポーツに勤しむ義塾の発展に寄与しようとする塾生が先輩塾員の協力のもとに技をみがき、体力の向上をはかるとともに、品性を陶冶し、学生スポーツの本旨を全うするために協同すること」、とあり現在は 40 部で構成されています。さらに「一般塾生の運動競技を奨励指導し義塾教育の目的達成に協力するため」の塾内競技部が設けられています。

慶應義塾にあつて塾生は体育会各部ともに「来る人拒まず」の会則の方針により何時でもどこでも入部できる環境にあります。

2012 年ロンドンオリンピック、パラリンピックにて多くの塾員、塾生が大活躍しましたが取り分けパラリンピック出場の陸上競技 100、200m 競争、走り幅跳びにおいて入賞を果たした選手はれっきとした体育会陸上競技部所属の塾生です。入学早々に門を叩き入部しましたが他の部員との分け隔てもなく計画通り練習ができた結果の栄冠です。これぞ慶應義塾体育会、と学生スポーツの範を示してくれました。

理工学部にあつても藤原賞受賞の選手がプロ野球団にトップ推薦で入団しました。早速技術を科学する、と張り切っておりマスコミも新たなる展開を期待しています。体育と教育の世界において勝利至上主義のもと優秀なアスリー

トを好条件で入学させ卒業できないまま世に送り出している多くの大学、教育者には慶應義塾の文武両道の方針は強いインパクトを与えました。

学業との両立は時間管理、体調管理を初め幾多の困難がありますが本人の努力は勿論、先生、職員を初め先輩の物心両面における協力あつてのことで体育会の設立趣旨、“先輩塾員の協力のもとに”の原点を見ます。塾生自身も卒業後は現役の支援に回り、良き伝統は、現役と先輩の連帯感、一体感を醸成し継続は力、宝となっており喜ばしいことです。特に体育会出身者の強いリーダーシップの賜物と思料します。

学業か競技かに迷い悩む塾生は、時には留年、休学の道を選びますが多くのOB、OGが相談に乗り協力する仕組みは他の学校から不思議がられています。受験における指導、在学中、就職の段階も同様に本支援体制がさらに強くなるように願っています。体育会、先輩の指導の下、理工学部の塾生が慶應義塾体育会40部の主要メンバーとして1人でも多く、競技、対抗試合に参加し活躍されることも合わせ期待しています。

小泉信三先生の「スポーツが与える三つの宝」、体育会70周年における記念講演会でのお言葉ですが

- 1、「練習は不可能を可能にする」
- 2、フェアプレイ精神 **Be a hard fighter and a good loser!**
- 3、良き友を得る

は多くの体育会出身者の心の支え、座右の銘となっています。

三田体育会には矢上、四谷、藤沢の現役時代に慶應義塾体育会で活躍された塾生も参加されています。40部の更なる発展をめざし情報の共有を行いつつ共に発展の道を模索しています。目的に向かって汗した仲間は共通の価値観のもと纏まっています。理工学部体育会をはじめとする各キャンパスのOB、OG組織の皆様と互いに理解を深め、連携を良くしスポーツを通じて塾発展に寄与したい、と願う日々です。

理工学部体育会が75年を機にさらなるリードと100年、150年に向け新たな展開発展をされんことを期待しています。